

継承日本語と第二言語の狭間にいる大学生のための初年次教育
 First Year Education at University for Those Students Who May Be Considered
 Ambivalent Between Heritage and Second-language Speakers of Japanese

金山泰子, 藤本恭子, 国際基督教大学
 Yasuko Kanayama, Kyoko Fujimoto, International Christian University

1. はじめに

近年の国際化傾向に伴い、日本や海外における言語環境、個々人の言語使用状況は多様化しつつあり、その中で日本語を継承語として育つ子どもの背景や環境も多様化・複雑化し、様々な背景やレベル差のある「継承語話者」が存在すると考えられる。佐藤 (2019) やリー・ドーア (2019) も指摘するように、海外在住の日本国籍を持ちながらも日本生まれでない子どもや、日本に帰国予定がない子どもも増加傾向にあり、日本語を継承語として育つ子どもたちの言語背景は、さらに多様化・複雑化していると言えよう。また、日本国内においても、国際結婚の増加や国内外インターナショナルスクール進学者の増加、国際バカロレア認定校の広がりなどを背景に、バイリンガルや継承日本語話者の数も増える傾向にある。このように個人の言語背景(生育・家庭・教育環境等)、言語能力、各自が抱える言語の問題は多様化しており、日本語母語話者、継承日本語者、第二言語学習者のそれぞれの定義、区別化も曖昧になりつつある。

著者らが携わる日本語プログラムは、第二言語学習者のための日本語コースと継承日本語話者のための日本語コースに分かれており、継承日本語話者のコースは、2016年以前、3レベルに分かれていた(日本語教育課程, 2015)。しかしながら、上述したような近年の言語の多様化を背景に、継承日本語話者と第二言語学習者の狭間に位置するような学生が増加してきた。そこで、こうした学生に対応するために、2016年に「Introduction to Japanese for First/Heritage Language Speakers 第一言語/継承語話者のための日本語入門」というコースを新たに開設した。本コースは、継承日本語話者と第二言語学習者の狭間にいると考えられる学生の初年次教育の第一歩として位置付けられており、学生らは本コース受講後、継承日本語コースへ進むか、第二言語としての日本語コースに進むかを選ぶことになる。本コースは、大学及び日本社会で必要な日本語の基礎知識・運用を学ぶことを目的としており、学生らが大学の課程を継承語話者として進むか、第二言語学習者として進むかを決定付ける重要な分岐点ともなっている。また本コースは、日本語の学習やクラスメートとの対話を通じて、自己と向き合い、日本語や日本文化との関係を見つめ直す場としても機能している。継承日本語と第二言語との狭間にいる学生の初年次教育では、このような言語・文化的アイデンティティを再構築する機会を提供することが重要であると考えられる。

本稿では、本コースを含む継承日本語教育プログラムの概要を報告すると共に、近年増加しつつある継承日本語と第二言語との狭間にいる大学生のために必要な初年次教育の在り方について検討する。

2. コースの概要

2.1 受講生の背景

具体的にどのような背景の学生が本コースを受講するかを紹介する。

まず、プレースメントテストを実施し、作文とインタビューで日本語力を判定する。本コースを受講する学生の共通点は、第二言語学習者のような間違いが少なく、ネイティブネスが感じられるということである。しかしながら作文では以下のような問題が散見される。

- ・ひらがなが多く、漢字が少ない。あるいは、漢字の間違いが多い。
- ・話し言葉で書いている。
- ・第二言語学習者のような文法の破綻は少ないが、文法の間違いが少し見受けられる。
- ・まとまった量の文章が書けず、そのような文を書いた経験（学んだ経験）が少ないことがうかがえる。
- ・構成を考えて書くことができず、思ったまま書いている。
- ・抽象語彙がない。抽象概念に欠ける。

また、インタビューにおいても、発音や話し方にネイティブネスが感じられることをまず確認し、さらに学生の母語話者としての意識やこのコースを取りたいという希望なども考慮する。さらに、学生の家庭環境や教育的・言語的背景も重要な観点となる。

本コースにプレースされる学生の背景や特徴を挙げると、家庭環境としては、両親あるいは片親が日本人という学生や日系の学生に加え、最近では両親とも日本人ではないがほぼ日本で生まれ育った学生などがいる。家庭内言語の状況を見ると、両親あるいは片親とはある程度日本語で話す学生もいるが、ほぼ英語を使うという学生も多く、家庭内での日本語使用頻度が低いことが特徴と言える。また両親が日本人でない学生は家庭内では日本語は使用していない。教育背景を見ると、海外現地校、国内外インターナショナルスクール出身の学生がほとんどで、補習校などにはあまり通っておらず、漢字学習もあまりしてこなかったという学生が多いのが特徴である。

2.2 授業内容の概要

本コースは、週に6コマ（70分×2コマ×3日）で10週間のコースであり、以下のようなコースの目標を設定している。

- ①身近な話題であれば、ある程度の長さの文章が辞書を引ながら自力で読め、大意が取れるようになる。
- ②ある程度の長さの文章（意見・感想など）が書けるようになる。
- ③話し言葉と書き言葉の文体の違いがわかり、やや抽象的な語彙が使えるようになる。
- ④漢字約300字およびその漢字を使った語句の読み書きができるようになる。
- ⑤場面に応じて適切な話し方ができるようになる。

この目標に沿って、「読む」クラスでは、朝日新聞出版の「ジュニアアエラ」などを教材として、読解力を高めつつ、日本社会に関する語表現・知識などを身に付けることを目指し、さらにその記事についてクラスで意見交換や発表を行い、読んだ記事の内容について作文を書くことによって、まとまりのある文章を書く練習としている。「書く」については、作文を書く練習に加え、書き言葉と話し言葉の違い、メールの書き方についての知識を学ぶ。漢字については初級レベルの漢字 300 字をマスターすることを目標としている。これは、本コース終了後、次学期に継承日本語コースに進む学生にとっての漢字学習の基礎となると同時に、第二言語学習者のため日本語コースに移行する学生もいる場合を想定し、中級レベルへのプレースを目指しているからである。また、授業外の課題として、文字媒体の種類を問わず（インターネット記事、漫画、ポスターなども含む）、少しずつ、できるだけたくさん日本語の本や文章を読み、感想、気になった漢字・言葉・表現等を「学習記録ノート」に記録して毎週提出することを課している。

3. プロジェクト活動「私について」

3.1 プロジェクトの概要

上述したコースの内容に加え、このコースの大きな課題の一つが「私について」というプロジェクト活動である。プロジェクトの目的は、自分自身を振り返るとともに、自分自身を表現するための語彙表現を学ぶことである。自分自身の振り返りをクラスメートと共有して話し合う作業を通じて、クラスメートを知るとともに、他者との共通点や相違点を見出しながら、自分についてより深く知るきっかけとなっている。このプロジェクトでは、毎週一つのトピックについて、まず自分で考え、クラスメートと話した後、作文として提出する。作文のトピックは、「私の好み・性格・能力」、「私のまわりの人」、「住んでいたところ」、「学んだ学校」、「来学期への期待」、「将来の夢」、「10年後の私へ」である。授業では、まず簡単な質問項目を挙げたワークシートに各自記入する。なお実際に使用したワークシートは漢字にルビが付いている。またワークシート記入時には辞書使用可とする。

以下に「私の好み・性格・能力」の場合の質問項目の例を示す。

- ①まず、あなたを表す言葉（単語や表現）をたくさん書いてみよう。（ちょうどいい日本語の言葉がわからなかったら、辞書で調べて書いてみよう）
 - 1) 好み -好きなもの・こと -嫌いなもの・こと
 - 2) 性格 -どんな性格? -どんなときにそう思う? -人と比べて、どう?
 - 3) 行動 -すぐ行動する?しない? -大胆?慎重?
 - 4) 能力 -うまくできる・得意なこと -うまくできない・苦手なこと

- ②クラスメートと見せ合って、お互いのことを知ろう。そして、良い言葉・表現があったら、教えてもらって書いておこう。

このような質問に沿って記入したワークシートを元にクラスメートと話し合い、最後に、話し合ったことや自分で考えたことをもとに作文を書く。この作業を学期を通じて7回繰り返すことになる。学期の最後にこの活動を通じて考えたことについて口頭発表をし、文集としてまとめる。

3.2 プロジェクト活動から見えてきた学生の変化

このプロジェクト活動を通して、学生たちの様子を観察してみると、以下のような様子がうかがえた。

- ・他者に自分のことを伝えるための語彙や表現を学んでいる。例えば、ある学生は自分を表現するための語彙「責任感が強い」「好奇心が旺盛」など、それまで知らなかった表現を習得していた。
- ・自分の過去・現在・将来について考えるというプロセスの中で、自己と日本・日本語との関係を改めて見つめ直し、自己のアイデンティティを再構築していく様子がうかがえた。
- ・日本語でまとまった量の作文を書いたり、クラスの前で発表したりすることによって、自信をつけていく様子がうかがえた。
- ・他者との自分の経験を共有することにより、共通の背景を持つ他者とのコミュニティーを形成していく様子がうかがえた。
- ・コース開始時は、言語コースの選択について決断しにくい様子も見受けられたが、このプロジェクトを通して、継承語のコースを続けていこうという気持ちが固まってきたようだった。

4. 結論

最後に、本コースの意義と課題について述べたい。

このコースの意義の一つとして、学生のアイデンティティの再構築が挙げられる。この初学期が終わった後、学生たちは担当教員と協議の上、次学期に第二言語学習者のためのコースに進むか、継承日本語コースに進むかを定めることになる。決定にあたっては、日本語の「能力」のみならず、将来も見据えつつ、自分と日本語・日本の関係をどうとらえるか、自分の今後の人生の中でどう関わっていくか、なども考慮する。学生にとっては、今後の大学生活をどう過ごすかも含め、将来の方向性にもかかわる重要な分岐点であると言える。著者が直近で担当したコースでは、学生全員が継承日本語コースにそのまま進むことを選択した。それぞれの学生が日本語能力に問題を抱えつつも、自分にとって日本語は「第二言語」ではないと考え、自らが継承日本語話者であることを「覚悟」したということでもある。

またもう一つの意義として、コミュニティーの形成という点が挙げられる。現代社会では多様性が重要視されるが、一方ではバックグラウンドを共有する者同士のコミュニティーも非常に重要であると思われる。学生たちは、本コースでの活動を通して、自身と同じような境遇や背景を持つクラスメートの存在を認識し、自らコミュニティーを形成する様子がうかがえた。このコースがそのきっか

け作りのための重要な要素となっていると言えよう。

今後の課題としては、まず、どのような学生がこのコースの対象となるのか、「入口」つまりプレースメントの判断と、「出口」つまり終了後のコース選択を見極めることの重要性が挙げられる。

上述したように、現代社会においては「母語話者」「継承語話者」「第二言語話者」を定義し、線引きすることは難しくなりつつある。この線引きは、文化の多様性や国際性の拡張とともに、今後ますます曖昧化していくことが予想される。そのような社会の流れの中で、コースの「対象」「入口」「出口」を見極めるためには、我々教員が社会の変容とそれに伴う学生の変化を注意深く観察し、それに柔軟に対応していく必要があると思われる。

参考文献

- 佐藤郡衛 (2019) 『多文化社会に生きる子どもの教育』明石書店
- リー季里・ドーア根理子(2019)「北米の日本語学校における学習者のニーズの多様化」 近藤ブラウン妃美他 (2019) 『親と子をつなぐ継承語教育』くろしお出版 147-159
- ICU 日本語教育課程 (2015) 「2013 年度 JLP 新カリキュラム報告」 『ICU 日本語教育研究』 11, 45-95